

上原 美術館 通信

No.
23

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2023年9月28日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



1983年5月29日、上原美術館の前身の一つ、上原仏教美術館が開館しました。上原仏教美術館は翌年6月に下田市内の仏像調査に着手。やがて伊豆南部の一市五町、下田市・南伊豆町・河津町・東伊豆町・松崎町・西伊豆町の調査を終え、1992年に、調査報告書『伊豆の仏像南部編―平安時代から鎌倉時代の遺品』を刊行しました。この頃の調査は、鎌倉時代以前の彫刻を調査対象としていましたが、2002年から年代を限らず全ての彫刻を対象とし、2010年11月、南伊豆町教育委員会の依頼による調査を機に、仏画や仏具を含む全ての仏教遺物の悉皆調査に切り替えて、現在に至っています。本展は上原仏教美術館開館40周年を記念し、上原美術館の調査活動を、調査した仏像を通じて振り返るものです。

下田市宇土金、向陽寺の阿弥陀如来像(写真①)は、当館が調査を開始して間もなく、美術館正面にある、向陽寺から見出された仏像。西川新次氏(当時は慶應義塾大学教授)により、10世紀後半から11世紀半ばの像とされ、伊豆最古の阿弥陀如来像です。本像は修理を経て、当館に寄託され、40年近い年月を当館とともに歩んできました。

下田市蓮台寺地区には、古く蓮台寺という密教寺院があったと伝えられ、この寺の本尊、大日如来像と四天王像(下田市指定文化財)が天神神社に移されて現存します。これらの像は当館開館以前から注目され、大日如来像は、大正9(1920)年、国指定重要文化財に、四天王像は1981年に下田市指定文化財に指定されていましたが、当館も1984年6月17日、2回目の下田市内寺院調査で、再調査を行っています。このうち四天王像は、増長天像、多聞天像(写真②)が平安時代後期の像で、当初はこの2体で二天像だったものに、江戸時代、持国天と広目天が加えられて四天王となったようです。本展ではこのうちの平安の2像を展示。本像が神社の収蔵庫外で公開されるのは、今回が初です。

松崎町吉田寺の阿弥陀三尊像(写真③)及び毘沙門天像は、1987年11月の調査で見出されました。その後本像は、水野敬三郎氏(当時は東京藝術大学教授)らによる調査、1987年12月から1989年12月の修理を経て、1995年3月、伊豆を代表する鎌倉彫刻の一として、静岡県指定文化財となりました。

古くから知られていたものの、近年の調査によって新発見が得られた像もあります。河津町谷津区、南禅寺には26体もの平安時代の仏像、神像と、20数点の彫像残欠が伝えられています。当館は、大正大学・副島弘道研究室による調査、

成城大学教授・岩佐光晴氏を研究首班とする調査に協力したほか、数度にわたる特別展への出展を通じて、これらの像が伊豆の歴史を考える上で貴重な作例であることを訴えてきました。さらに当館ではこの諸像の研究の結果、これらの群像の背景に、造像当時活発化していた伊豆諸島の火山活動があるとの説を得ることができました。本展では南禅寺諸像のうち、かつては四天王を構成していたと考えられる、二体一対の天部像(写真④)をはじめ、5体を展示します。

江戸時代の仏教美術の調査研究に力を入れていることも当館の特色です。中でも、幕末から明治にかけて伊豆下田に住み、多くの仏像や仏画、書画を残した松本雲松(1796～1873)については、ご子孫にあたる菊池明氏(故人)、菊池新氏のご理解、ご協力を得、2006年から現在まで、十数年にわたって継続して調査研究を行っています。当館の調査により、松本雲松の作品は、彫刻80点、絵画40点(いずれも概数)が確認されていますが、現在も新たな作品の発見が続いています。本展では、松本雲松の代表作である、河津町、真乗寺の吉祥天像(写真⑤)、善膩師童子像のほか、菊池家に伝えられた、雲松唯一の自画像『松本雲松法眼図』、『花鳥図屏風』などを展示いたします。



写真① 阿弥陀如来像(平安時代) 下田市・向陽寺 ※上原美術館に寄託

当館の仏像調査は現在も継続中。三島市大社町の成真寺の薬師三尊像は、今年の2月13日に調査を行った仏像です。薬師如来像(写真⑥)は像高116.5cm、脇侍の日光菩薩・月光菩薩像は像高75.0cm前後。いずれも台座から両手を含む全容を針葉樹の一材から彫出する一木造りです。興味深いのは、伊豆の地誌『増訂豆州志稿』が、この像につき、箱根神社の別当寺であった金剛王院の本尊を、明治2(1869)年に当寺に移したものと記すことで、成真寺に伝わる他の古記録3点にも同様の記述があります。金剛王院東福寺は明治の廃仏毀釈の

際に廃寺となり、仏像は元箱根の興福院などに移されたことが知られていますが、本像もその一例と考えられます。本像は作風や技法から、室町時代末から江戸時代前期の像と思われませんが、天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めの際、箱根神社が、全山焼き討ちになっていることを考えると、本像は戦後復興の中で造像されたものとして良さそうです。この薬師三尊像も、寺院外での公開は本展が初めてです。

上原美術館が40年の歴史の中で出会った、伊豆の仏像の数々を紹介する特別展です。是非ご覧ください。(田島)



写真② 多聞天像(平安時代) 下田市指定文化財 下田市・天神神社



写真③ 阿弥陀三尊像(鎌倉時代) 静岡県指定文化財 松崎町・吉田寺 ※上原美術館に寄託



写真④ 天部像(平安時代) 静岡県指定文化財 河津平安の仏像展示館



写真⑤ 吉祥天像(江戸時代、松本雲松作) 河津町・真乗寺



写真⑥ 薬師如来像(室町後期～江戸前期) 三島市・成真寺

本年、上原仏教美術館が開館して40年、そして上原近代美術館が開館して23年を迎えました。上原美術館の一つの特徴は、小さなまなざしです。個人のコレクターが自らのまなざしで集めたコレクションの数々。そこにはコレクターの思いが宿るとともに、その背景にコレクションが辿って来た様々な道が広がっています。目の前にある一つの絵画は、心の耳を傾けてみると、そのストーリーを静かに語り始めます。本展では、その小さな声に耳を澄ませて、小さな絵の奥にある豊かな世界をご紹介します。

アンドレ・ドランの《裸婦》は、上原コレクションのはじまりを語ります。1967(昭和42)年5月、大正製薬に勤める39歳の上原昭二(現・名誉会長)は、ある画廊でこの小さな油彩画と出会いました。絵のことはよく分からない上原でしたが、この絵に不思議な魅力を感じて、初めて油彩画を購入しました。しかし当時、同居していた両親に「分不相応」と怒られることを恐れて、押し入れに隠しては、たまに出して眺めたといいます。次第に穏やかな光と色彩、そして静かに語りかけるような女性の存在感に引き込まれて、「足長お嬢さん」と呼んで愛蔵します。そこから徐々に自分の好きなものだけを集め続けて、いつしか印象派から日本近代絵画まで、幅広いコレクションが形づくられました。そして、古希を過ぎた2000(平成12)年、上原はコレクションを寄贈して上原近代美術館を設立します。ひとりのコレクターのまなざしのもとに集った絵画は、ドランの《裸婦》のまなざしのように、優しさや穏やかさといった気配をまとっています。

《雪中の家とコルサース山》は、モネがノルウェーの雪山を描いた作品です。浮世絵のコレクターであったモネは、その色彩や構成に大きな影響を受けました。モネは浮世絵に描かれる富士山に憧れを抱きます。そして、ノルウェーを訪れた際、郊外で見た300メートルほどのコルサース山に、まだ見ぬ富士山を重ね見ました。

本作の制作からおよそ四半世紀後の1919(大正8)年、大蔵省委嘱の金融調査のため渡欧した黒木三次氏と竹子夫人はモネと親しくなり、その後、度々邸宅を訪ねるようになりました。そして、モネから直接譲られたのが《雪中の家とコルサース山》です。写真を趣味とした黒木氏はモネの家族と本作、そして竹子夫人が並ぶ記念写真を撮影しています。本作



アンドレ・ドランの《裸婦》1929年



クロード・モネ《雪中の家とコルサース山》1895年



ジヴェルニーのクロード・モネ邸にて。左から黒木竹子夫人、モネと《雪中の家とコルサース山》を持つその家族。黒木三次撮影、1919(大正8)年。

右下にあるサインは、このときにモネが記したものです。

黒木夫妻は本作を日本に持ち帰りました。黒木氏のコレクションは一部公開され、志賀直哉や岸田劉生なども目にしています。本作は黒木氏が愛蔵した後、関西屈指のコレクター和田久左衛門氏など幾人かの手に渡り、2005年に上原昭二が収集し、いま上原美術館に収められています。モネが浮世絵の富士山に憧れて描いた絵が、今では富士山に連なる伊豆半島にあることに不思議な縁を感じます。

本展では、上原コレクションそれぞれの絵画が語るストーリーに耳を傾けます。上原が日本で偶然出会ったゴッホの初期作品《鎌で刈る人(ミレーによる)》など、絵画が辿ったストーリーをご紹介します。上原コレクションを伊豆の地でお楽しみいただき、見る方それぞれの物語を紡いでいただけましたら幸いです。(土森)

上原美術館に収蔵されている上原コレクションは、大正製薬名誉会長の上原昭二(1927年生まれ)が自らの好みで蒐集した絵画を中心に形成されています。この上原コレクションの成り立ちには、上原の両親が日本画好きであったことが大きな影響を与えています。

上原の父・正吉は、大正製薬代表取締役社長、会長を務め、参議院議員としても活躍した敏腕の実業家でした。多忙を極めてはいましたが、仕事を離れると、カトリア栽培、カメラ、カラオケなど、多くの趣味を持ち、没頭していたといいます。なかでも若い頃から日本画の鑑賞、そして収集を好み、妻・小枝と共通の趣味として楽しんでいました。上原が幼い頃にはよく画商が自宅を訪れ、風呂敷から軸を取り出し、畳の上で広げるようすを横から覗いていました。自宅では両親が蒐集した日本画が季節ごとに掛け替えられ、幼い頃から美術作品に触れる機会が多くありました。日本画好きの両親のもと、上原は自然と絵画への興味・関心を育んでいきました。

日本画が好きであった小枝がとりわけ気に入っていた作品は、松林桂月《白萩》でした。小さな白い花をつけた



父・正吉、上原昭二(小学校5年生頃)、母・小枝 1938年頃

白萩が、ススキの後ろで可憐に咲くようすは、美しいだけではなく、冬に向かう哀愁も感じさせます。《白萩》は秋になると自宅に飾られ、長年上原家で愛蔵されてきました。穏やかな本作は、家族の癒しとなっていたのかもしれない。

母との思い出が、上原コレクションに彩りを添えているのが「柿の絵画」です。上原コレクションには、小林古径《杪秋》をはじめとする日本画や、香月泰男の油彩画《柿》など8点の「柿の絵画」が収蔵されています。小枝の郷里である上原美術館周辺では、秋になると山や道路脇、民家の庭先などに、艶やかに実をつけた柿の木を多くみることができます。きっと小枝も小さな頃からこの光景をみていたのでしょう。上原も子どもの頃は自宅になった柿の実をよく食べたといいます。上原にとって柿は、どこか懐かしく、親しみのあるものでした。そして、柿の絵に惹かれた上原は、自宅で大切に「柿の絵画」を愛でてきました。現在、これらの絵は、小枝の故郷に建つ上原美術館で鮮やかに実り、来場者を楽しませています。

上原は1997(平成9)年、古稀を迎えたことを機に、母の出身地で、両親が晩年を過ごし、菩提寺のある下田に美術館を設立することを決断します。2000(平成12)年、正吉・小枝夫妻が設立した上原仏教美術館の隣に、上原近代美術館を設立しました。その後、2つの美術館は2017(平成29)年にリニューアルして一つになり、上原美術館が誕生、現在に至ります。



松林桂月《白萩》1953(昭和28)年頃



アンリ・ルソー《両親》1909年頃

アンリ・ルソー《両親》は、上原が米寿になったときに上原美術館に寄贈された作品です。ルソーが晩年に描いたこの小さな油彩画は、ルソーの両親が正面を向いて座る姿を捉えており、素朴で愛らしい作品です。かつては画家・藤田嗣治が所蔵しており、パリの自宅に父親の写真とともに飾られていました。藤田没後は、夫人が愛蔵していましたが、作品を大切にすることに譲りたいという遺志により、上原のもとにやってきました。

両親から受け継いだ日本画の作品とともに、ルソー《両親》はゆかりの地にある美術館に収められています。上原の両親への想い、そしてさまざまな人々の想いが込められたこれらの作品は、新たな出会いを上原美術館で待っています。

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、担当学芸員が解説を行いました。
展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。開催時間になりましたら、各展示室にお集まりください。
※要入館券。詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

番組

伊豆を紹介する旅行番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「奥が深いぞ！下田の魅力再発見の旅」(リポーター勝又楓さん)の回で、当館が紹介されました(8/31:テレビ埼玉/9/1:テレビ神奈川、千葉テレビ)。番組放映後はYouTubeでもご覧いただけます。同YouTubeでは昨年度の特別展『無冠の仏像』をご紹介いただいた「心きままに出かけてみたら...伊豆・下田の旅」(リポーター久保沙里菜さん)もご覧いただけます。

博物館実習 8月7日～11日

学芸員資格取得を目指す学生を対象にした博物館実習を8月7日から5日間行いました。今年は静岡文化芸術大学、聖心女子大学から計5名を受け入れての実習となりました。

毎年、少しずつ内容を工夫しながら実習を行っていますが、初日は田島主任学芸員から当館の成り立ちとリニューアル、美術館の業務の話から始めました。また開催中の展覧会を担当学芸員の案内で見学しました。2日目、3日目は仏教館、近代館それぞれのバックヤードを見学、実際に作品を出して取り扱う作業を行いました。仏教館ではレプリカの仏像を使用した調書の作成や、平安時代の古写経の巻子や掛軸を広げ、近くで鑑賞を行いました。また江戸時代から近現代までの掛軸を一人ずつ扱い、即興で作品の解説を行いました。近代館は作品のコンディションチェックをし、調書を作成しました。額作品の取り扱いは、実習生が実見希望する作品を選んで、学芸員と一緒に箱から出す作業を行いました。実習生からは「緊張したが、間近で作品を見て感動した」などの感想がありました。4日目は美術館近くの太梅寺へ伺い、寺院に伝わる仏像や文化財の現状を実際に見学させていただきました。見学後に美術館が担う文化財保護活動の座学を行い、翌日に控えている模擬展示の企画立案を実習生全員で話し合いました。

5日目は土森主任学芸員から展覧会の広報について話し、実習生で企画立案の話し合いを行いました。今年度はパネルの位置や展示ケースの利用も実習生同士で考え、試行錯誤をしながら斜めに展示用パネルを展開した開放感のある展示となりました。東西の女性をテーマにした展示は作品を絞って、とてもまとまりのある内容でした。実習生からは「最初はなることかと思ったが、話し合いをする中でまとまって楽しく展示できた」という声が多く出ました。(櫻井)



ギャラリートーク(上:近代館/下:仏教館)



番組収録



博物館実習

出張ワークショップ『はじめての日本画体験』

伊豆の国市野外活動センター(茅野っ子ひろば) 研修室 7月27日 講師:土屋絵美(当館学芸員)

伊豆の国市子ども教室「あいキッズ」の夏講座『はじめての日本画体験』を、今年も茅野っ子ひろばにて開催しました。この講座では、日頃家庭や学校ではなかなか体験できない「日本画」について、子供たちと制作しながら楽しく学びます。今年は小学校1～4年生の14名が参加し、日本画の画材である岩絵の具や胡粉(カキの貝殻を原料にした白い絵の具)を使って色紙に思い思いの絵を描きました。「岩絵の具は触るとザラザラしていて、とても面白い触り心地」と、初めて見る画材に参加者は興味津々のようでした。岩絵の具がさまざまな鉱物などから作られていることや、同じ鉱物から作られている絵の具でも粒子の大きさによって触感、色の違いがあることに驚いていました。各自、素敵な色紙が完成した後は、みんなで完成作品を鑑賞しました。参加者全員が「楽しかった」と、笑顔で2時間の講座を終了しました。

『親子で「日本画」絵の具あそび』

当館アトリエ 7月29日 講師:牧野伸英(日本画家/当館日本画教室講師)

夏のワークショップ第1弾として、『親子で「日本画」絵の具あそび』を開催しました。今回のワークショップでは、岩絵の具と金箔を使って小さな作品を作りました。5歳から小学生までの子どもとその保護者を対象とし、当日は午前の部に8組19名、午後の部に4組10名が参加されました。

今回は「相手が喜んでくれる絵をかいてプレゼントしよう」をテーマに制作を進めました。まず、親子で相手が喜んでくれる絵を描くために、互いに好きなものや欲しいものなどを考えるところからスタートしました。描くものが決まったら、岩絵の具を使って制作開始!今回の制作では、粗目の岩絵の具とメディウムを混ぜて、盛り上げるようにして色紙に描いていきました。講師の牧野伸英先生は「こうやって筆を動かすと上手にできますよ」とやさしく言葉をかけご指導くださいました。参加者は初めて扱う画材に苦戦しながらも、描き進めていきました。絵が描けたら、いよいよ金箔の登場です。描いた絵の画面全体に薄くメディウムを塗ったら、そっと金箔をのせ押さえます。金箔が十分に乾いたら、絵の具の盛り上がった部分の金箔をこすり出し、出来上がりです。完成作品は、自分の贈りたい相手にプレゼントしました。参加した保護者は「むずかしかったけど、中々できない体験ができてよかったです」と、親子での制作を楽しんでいました。

『親子で色あそび—透明水彩で』

当館アトリエ 8月16日、17日 講師:小野憲一(現代美術作家/当館デッサン・水彩画講師)

夏のワークショップ第2弾は、『親子で色あそび—透明水彩で』を開催しました。2日間にわたって開催されたワークショップは、16日に6組15名、17日に5組14名がご参加くださいました。講師の小野憲一先生より、筆やパレットの使い方について説明を受けた後、小野先生と一緒に透明水彩絵の具を使って、黄色に赤を少しずつ加え、黄色から赤までのグラデーション作りに挑戦しました。その後、黄色から青、赤から青のグラデーションを作り、さらに赤、青、黄色の3色を混ぜて黒を作りました。さまざまな色作りを学んだあとは、自由に混色あそびの時間。色を塗り重ねたり、水でぼかしたりして、とてもきれいな色の重なりが出来たり、色と色が混ざって濁ったりするのを楽しみました。小野先生が青のみでも、水分量や筆のタッチによって多様な表現ができることを実演すると、各テーブルには、刷毛や筆、手を使って描いた青の作品が次々と誕生。アトリエ内は青の世界に染まりました。ここで一旦描く手を休め、自分たちが描いた作品を振り返る時間を作りました。自分の描いた中で気に入った作品を発表し、みんなで鑑賞しました。

そして、色あそびの最後は、1枚の大きな紙に親子で協力して自由に絵を描きました。念入りに相談して描き始めるグループもあれば、好きな色を勢いよくどんどん塗り重ねるグループもあり、いずれも親子で協力して制作に励んでいました。参加者からは「自宅ではできない大きな絵を描く事ができ楽しい」という声も多く、今回も好評のうちに終了しました。



出張ワークショップ『はじめての日本画体験』



『親子で「日本画」絵の具あそび』



『親子で色あそび—透明水彩で』

伊豆だより



館庭の池では、今夏もサルスベリの花が咲きました。夏の日差しを浴びて咲く濃いピンク色の花は、濃緑の木々を背景に浮かび上がってくるように目を惹きます。美術館周辺は山の緑がより深く、海とはまた違う良さの夏の風景が広がります。美術館通信が発行される頃は秋の気配が漂うようになるでしょうか。

さてこれから学芸員は秋の特別展準備の大詰めに入ります。当館が下田に開館して40年、さまざまな伊豆のみほとけや貴重な文化財、地域の方々との出逢いがありました。特別展では上原美術館のこれまでの歩みを、展示作品の背景に感じていただければ幸いです。
(櫻井)

上原コレクションが見られる展覧会



ゴッホと静物画 伝統から革新へ

SOMPO美術館 2023年10月17日(火)～2024年1月21日(日)

ゴッホは《ひまわり》をはじめ多くの静物画を描きました。そこには17世紀オランダから続く静物画の伝統が息づいています。ゴッホが先人たちから何を学び、そして同世代の画家とどのように交流し、影響を与え合ったのか。本展ではその関係が入念に辿られています。当館からはセザンヌ《ウルピノ壺のある静物》、ルノワール《果物の静物》の2点を出品します。ゴッホの静物画と並ぶことで、新たな魅力が浮かび上がると思います。本展はもともと2020年に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により延期となっていました。長い準備期間を経て、この秋いよいよ開催となります。
(土森)



モネ 連作の情景

上野の森美術館 2023年10月20日(金)～2024年1月28日(日)

大阪中之島美術館 2024年2月10日(土)～5月6日(月・休)

1874年に第1回印象派展が開催されてから150年を迎えることを記念し、上野の森美術館と大阪中之島美術館でモネ展が開催されます。国内外のモネの代表作が60点以上集結し、連作に焦点を当てながら、移ろう光を描き続けた画家の生涯を辿る展覧会です。当館からは《ジヴェルニー付近のセーヌ川》を出品。ジヴェルニー対岸のポール＝ヴィエから見たセーヌ川は、本作のほか同じ構図で数点描かれています。モネ初期の作品《昼食》(1868-69年、シュテッデル美術館)から《積みわら》や《睡蓮》の連作に至るモネ芸術の展開を概観する記念すべき展覧会です。
(土森)

次回休館日は2024年1月9日(火)～1月19日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30～16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引